高山

高山の原生林を守る会

会報　第 68 号

2009年4月

雨乞山自然林観察会

２月８日（日）に雨乞山自然林観察会を実施しました。地元会員も含め21名の参加者でした。今回は伊達市により自然公園として整備されたコースの雷神登山口から雨乞山に登り水返登山口に至る周回コースを辿りました。

登山口から早速、急登となりますが、参拝道でもあるので道幅は広く拓かれています。周辺はクリ−コナラ林ですが、中腹で乾燥した葉を着けたままの潅木に出会いました。ヤマコウバシです。「高山の原生林を守る会」の観察会では初めての樹木です。周辺ではコバノトネリコも多く見られました。斜面を登りきると山名の由来となる雷神社と大山祇神社が祀られていました。奥田さんが若かりし時に登った時は注連飾りが施されていたそうですが、今回は静かなたたずまいを漂わせるだけでした。尾根伝いに拓かれた登山道周辺ではミヤマガマズミ、オケラ、ナガバノコウヤボウキ、ウリカエデなどこれまでの観察会ではあまり見られない植物が確認されました。

間もなく頂上に到着し霊山や御幸山などの周辺の山々の展望を楽しんだ後、水返登山口への山道を下りました。こちらは所々に安山岩と見られる岩が露出しケヤキなども時々姿を見せます。途中では珍しいサンショウやイヌザンショウの大木などが現れ、クヌギやカヤなど地域性を反映した樹木も観察できました。また、下山口近くではウワミズザクラの独立樹が存在感を主張していました。登山道からあぜ道に出るとイノシシ狩りのわなが設置され、廃園化した果樹園の光景とあいまって人の営みと野生動物との複雑な１面を垣間見ることができました。

標高 400m足らずの低山ですが、秘められた名山を発見した思いを強く感じました。いつまでも残り少ない自然植生を損なうことなく保全されることを願いながら、帰路につきました。

第 102 回雨乞山観察会報告

権藤　齊嗣

口は災いの元である。

2007 年２月４日の第 88 回観察会・仁田沼雪上観察会以来の２年振りの参加だったが旧知の方々は暖かく迎えてくれた。最近、昔の事は良く憶えているが、今の今の事をちょいちょい忘れて何しにここに来たんだっけ？ばかりである。２年前とは昔の事である。鎌田さんに、仁田沼でアオダモの冬芽の色は鳩羽鼠色と教わった。これを憶えてて、口にした為、観察記を書く破目になってしまった。『鳩羽色とは、やや鼠がかった藤系の色を指します。色名は、神社等で見かける瓦鳩の羽毛の色からきています。紫実が強いものを鳩羽紫、鼠色が強いものを鳩羽鼠と呼びます。明治から大正にかけて、藤色と共に和服の地色としてよく用いられ、流行した色で、一般に鳩羽色は、この鳩羽紫を指します。』（日本の伝統色･灰色･黒編による）

話は、こうである。守さんが珍しい木を見つけ皆に問いかけようとした矢先、鎌田さんが『ヤマコウバシ』と口バシッテ（失礼）しまった。その木は根元から４本に分かれていたが、冬芽の様子が違い木肌もなにやら違うようだ。こちらはアオダモじゃない？と誰かが言った。そこで同定談義が始まった。小生記憶の箱から、アオダモ⇒バット⇒仁田沼⇒冬芽⇒鳩場鼠色と辿った。冬芽はその色をしてないので目出度く４本ともヤマコウバシとなった。その後この山はヤマコウバシの宝庫である事が分かった。

やまこうばし　（山香ばし）　Lindera glauca 落葉低木【くすのき科くろもじ属】　分布　本、四、九州４月ごろ新芽が伸びるまで、枯れ葉を枝につけている４～５月に緑色の小花を咲かせる花は個性がないが枯れ葉が個性を主張しているアウトサイダーな木だ。日当たりの良い山に生える。雄雌異株。実は 7㎜ 大の円形で秋に黒く熟す。葉は互生し長さ 7cm 程度の楕円形で先尖り、縁は鋸歯でなく全縁で波打つ。木肌は灰褐色で平滑。実の写真は 10 月の始めで春芽をもうつけている（私の花図鑑による）。

このヤマコウバシはインパクトのある木だった。他には、クロモジ、クマノミズキ、サンショウ、タカノツメ、ミヤマガマズミ、ナガバノコウヤボウキ、ホウヨウがさんまの骨に似てるオケラ、ツリバナ、ウダイカンバの樹齢による木肌の変遷、ツノハシバミ、ネジキ、アズキナシ、アブラチャン（似てる木はダンコウバイ）、ブラシの様な花が咲く頃に来て確認しようとなった。暫定ウワミズザクラ等々。動物の落し物もあった。小鳥の森で昼食して散会した。

急登

ヤマコウバシ

雷神社と大山祇神社

サンショウ

鹿 狼 山 か ら　８　～鹿狼山の小鳥たち～　小幡　仁子

冬の阿武隈は小鳥たちの天国である。鹿狼山にもたくさんの小鳥たちがやってきて、葉をすっかり落としたコナラやイヌブナの枝に止まるので姿が確認できるようになる。いつの観察会であったか、会代表の高橋さんが、「今日は〇種類の鳥がいましたね。〇〇と××と・・・」というのを聞いて驚いた覚えがある。自分には小鳥の姿は見えなかったし、鳴声を聞いてもさっぱり分からなかったからだ。町の図書館に小鳥の本があって、CD が付いていたので毎晩寝る前に聞いてみたが、小鳥の囀りはあまりにも心地良く、すぐに眠ってしまい、この方法で覚えるのは無理と諦めた。それでも、鹿狼山に通ううちに、少しずつは分かるようになっていった。シジュウカラは最初に覚えた。ほっぺが白いから遠くからでも見分けが付いた。それから、ある日曜日の朝に、「トトトト・・・」と音がして、ドラミングの音だと気が付いて庭を見たら、桜の木にコゲラ君がいた。ちょうど次男が起きてきたので、双眼鏡を渡すと「ほう～、コゲラっていうのかあ、鹿狼山からきたのかなあ」と言っていた。「ギーッ」と鳴いて行ってしまったが、木に垂直に止まるし、腹に斑点があり、鳴声も分かりやすい小鳥である。小鳥たちは忙しく首を動かしながら、一生懸命何か啄ばんだり、「チッチッチッ」と鳴いたりして愛くるしい生き物であり、鹿狼山に登るときの楽しみの一つになった。

先日、午後から一人で鹿狼山に登った。午前中は人が多いので、警戒心の強い小鳥たちは余り姿を見せない。静かに一人で登っていると結構向こうからやってきてくれるのである。そしたらのっけから桜の木に止まっている大きな鳥に出会った。「うわあ～何だ、この偉そうな鳥は！」とカメラを向けたが、逃げる気配もない。飛んでいかないうちにとシャッターを何回もきった。クチバシがかぎ状になっていたから、猛禽類の仲間とは思ったが、私の頭の引き出しの中からは名前が出てこなかった。それにしても堂々としたものである。そのうちに大量な糞をして飛び去ってしまった。身体を軽くするために長く木に止まっていたものか。飛び去る姿は颯爽としていた。この後、少し歩いたところで、エナガの群れがやってきた。１０羽以上はいた。小さな体に長い尾が付いているので、これも良く分かる。さかさまに小枝にぶら下がったり、枯れたアジサイの花を啄ばんでいるのは、種でも入っているのだろうか。中にヤマガラが２羽ほど混じっていた。胸のオレンジ色が美しかった。動かないでじーっとしていると、かなり近くで見ることができた。「チリリチリリ」とよく鳴き、よく動くし、写真に撮るは難しかった。

しばらく眺めていたら、Y 君のことが思い出された。Y 君は３８歳の若さで癌に倒れ、逝ってしまった山の友達である。レスキュー隊員で、頼りがいがあって、いつも穏やかな笑顔だった。２０年以上も前のこと、あの時は北海道をモトクロスバイクで走り、大雪山を登ってきたという彼を、みんなで囲んで土産話を聞いていた。「ナキウサギがいたんですよ」と言っていた。「へえーどんな風に鳴くの」という質問に、彼はえーと、と言いながら「チッチッ、チッチッ」と真顔で鳴声をまねしてくれた。北海道・大雪山で聞いてきたそのままを何とか伝えようとしていたと思う。みんなで笑ったものだ。彼を思い出したのはナキウサギと小鳥の声が重なったものか。こうして独りで鹿狼山を歩いていると、様々なことが頭をよぎる。子供二人と奥さんを残して逝ってしまったけど、彼は家族や山の仲間の思い出の中で生きているのだ。

３月末になれば、スミレやカタクリ、キクザキイチゲと次々に花が咲く。コナラやシデ類の新緑はことの他美しい。そして、緑が濃くなり葉が繁れば小鳥たちの姿を見つけるのは難しくなる。期間限定のお楽しみである。

「サシバ」のようです

冬の鹿狼山は明るい

ウマノスズクサの招き　　鎌田　和子

2008 年の夏、ウマノスズクサを偶然見つけてから、私の観察の対象は「蝶」に移ってしまった感じです。ここ数年は、自宅近くの植物観察のみに甘んじなければならない生活を強いられていましたが、それにも行き詰まりを感じ始めていた矢先でしたので、「蝶の世界」はこの上なく新鮮なものに感じられるのでした。いつ出会えるかわからない蝶を、自分が追いかけるようになろうなど、考えてもみなかったことです。

思えば、ウマノスズクサという植物がジャコウアゲハの食草だと知ったのは 20 数年前のこと。家を新築したときのカーテン屋さんが、優雅に舞うジャコウアゲハをビデオカメラで撮影し、楽しまれているという話の中に、ウマノスズクサという植物の名前が出てきたのでした。その響きのいい植物名は私の脳裏に焼き付いていたのでしょう。昨年、阿武隈川のサイクリングロードで偶然カーテン屋さんに出会ったとき、ウマノスズクサのありかを尋ねたほどですから。彼の話によると、ウマノスズクサは摺上川が阿武隈川に注ぎ込むところより少し下流の、水門の辺りに生えていたけれど、重機の草刈りが入るようになってから消えてしまったようなのだと、残念そうに話していました。それで、もうここにはウマノスズクサは無いのだと思っていたのでした。

①　ウマノスズクサ

②　もうすぐ蛹に

ところが、オオマツヨイグサを探しに、普段はほとんど歩かないコースに足を向けたところ、図鑑でしか見たことのないウマノスズクサ(写真①)に出会ったというわけです。それは、カーテン屋さんが教えてくれた水門の対岸にありました。すぐにカーテン屋さんに連絡しました。すると、彼は蛹で越冬したジャコウアゲハが羽化し、成虫となったのが、ウマノスズクサに卵を産みつけているかもしれないと言うのです。ワクワクしてきました。翌朝、涼しいうちに自転車を走らせ、ウマノスズクサの葉裏を観察しました。卵、卵と、卵だけをイメージして探しました。と、黒っぽい虫がウマノスズクサの葉を食べています！ジャコウアゲハの幼虫に違いありません。これで今夏は優雅に飛び交うジャコウアゲハを見ることができるはず。

④　ヒメアカタテハ

その夜、久しく会わなかった「虫の好きな友人」に、電話でジャコウアゲハの幼虫を見つけたことを伝えました。翌朝、彼女はやってきました。アレコレ話しながら、二人でウマノスズクサの葉裏を返す行動を開始しました。ジャコウアゲハの卵はアゲハやキアゲハとは違うらしいと聞いて、二人とも大いに興味があるのです。幼虫は目につくのですが、卵は見つかりません。そうこうしていると、細い草にジャコウアゲハの幼虫が張りついて(写真②)いるのが目にとまりました。前蛹というスタイルです。こんな人目につくところで、こんな弱々しい草に、蛹になろうとしているなんて！心配です。彼女いわく「蛹になる場所を探したのでしょうね。でも適当なところが見つからなくてどうにもしようがなくって…」と。堤防の道端なので木はありません。せいぜいイタドリの茎くらいかな、丈夫そうなのは…。その後、彼女はウマノスズクサに花芽がついているのを見つけました。これが花芽なのか！早く咲くといいな、いつ咲くのかなと、小さな花芽をケータイのカメラにおさめていると、中学駅伝の朝練の生徒たちが走ってきました。なぜか、先ほどの「前蛹」が気になり、行って見ると、前蛹がありません。細い葉には黒く縮んだ脱皮殻がついているだけでした。えっ、いつのまに蛹になったの？…でも蛹が無い！…すると、友人は

③　ウマノスズクサの花

⑤　ベニシジミ

⑥ツバメシジミ

⑦ヒメウラナミジャノメ

⑧　キタテハ

⑨　アカタテハ

落ち着払って「蛹が落ちてしまったのではないのかな。ほら、そこに落ちてますよ」と言うのです。「どれ？どこ？」と慌てる私。後から分かったことですが、蛹になろうとして足場糸をかけるのだけれど、草がホニョホニョしているから十分に体に巻きつけられなかったのでしょう。脱皮した途端、糸がはずれて落ちてしまったものと思われます。ジャコウアゲハの蛹は「黄色」でした。拾い上げた「黄色い蛹」をどうするか、迷い、考えた末に、彼女が面倒をみようということになりました。その「お菊虫」の後日談については長くなるので、今はやめます。

そんなことがあって、ジャコウアゲハの幼虫の生長を観察することになったのでした。度々その場所に通い、ウマノスズクサの花(写真③)の色や形、内側に滑らかに向いた毛(虫が一度入り込むと二度と出られなくなるらしい仕掛け)を感心して眺めている私のそばに、いつのまにか「蝶」が止まっていることがあります。その蝶たちは、草むらの花に吸蜜に寄ってくる蝶であったり、お日さまのぬくもりを翅に受けて休息している蝶であったりすることは自然に理解できました。その場に立っているだけで蝶が寄ってくるなんて、思いもしないことでした。止まって翅を開いたり閉じたりしている蝶を、ケータイのカメラで撮ってみました。カチャッという音に反応して逃げていってしまうのもいましたが、朝陽のぬくもりをゆったり浴びている蝶(写真④)や、蜜を吸うことに夢中の蝶がいて、１、２枚撮ることができました。帰ってから図鑑で蝶の名前を調べるのですが、蝶はアゲハとキアゲハくらいしか分かりませんから、図鑑の総めくり法で調べることになります。やっとのことでヒメアカタテハの頁にたどりつきました。でも、アカタテハというのにも似ていて、さあ、どっちかなと迷ってしまいました。自分の撮った写真の蝶と図鑑の蝶をじーっと見比べると、後ろばねの模様がヒメアカタテハとぴったり合うこと。アカタテハと似てはいるけれど、アカタテハとは違うことが確認できました。そうか、蝶も植物も同じなのか！スミレの勉強を始めたときのように、出会った個体を図鑑の総めくり法で調べ、似ているものがあるときは、よーく観察して識別のポイントを見つければいいことに気がつきました。

そんなふうにして、「蝶を追う」日々が始まったのです。そうしたら、今まで気にもとめなかった蝶が見えてくるから不思議です。自分の家の庭に、散歩道のサイクリングロードに、身近なところに数種類もの蝶(写真⑤⑥⑦)が生息していました。毎日ちょっとの時間を見つけては、今日はこっちを、明日はあっちへと、蝶との出会いを求めて歩く楽しみを覚えたのです。同時に、小さな「蝶」が生きる「自然環境」について考えさせられることにもなりました。それは「自然と人間」との関わりを切実に考えさせられることでした。

今は冬。蝶の姿を見かけることはありません。春になると、また蝶が舞うでしょう。でも、一抹の不安を覚えます。重機による草刈り以後、ぱったり姿を消してしまったヒメウラナミジャノメが、果たして季節の到来とともに出現するのでしょうか。成虫で越冬するというキタテハ(写真⑧)やアカタテハ(写真⑨)は阿武隈川の河川敷のどこに潜んでいるのでしょう。無事に越冬に成功するのでしょうか。気になるところです。小さな蝶が生きていける環境こそ、人間にとっても快適な環境なのだと、ある本で読みました。本当にそのとおりなのだと思います。そういう環境を維持するために、自分に「何か」できることはないものでしょうか。蝶が再び出現する春を待ちながら考えてみたいと思います。

(2008.12.14)

東北ブナ紀行　33

奥田　博

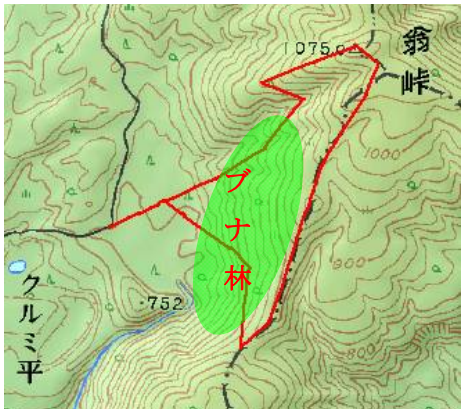
奥羽山脈は山形県北部で標高を落とす。奥羽山脈ではもっとも低い標高となり千㍍を切る山がしばらく連なる。そんな中に翁山や奥羽山などのブナの山が点在していた。

６４）翁山

翁峠とも呼ばれるこの山は、山形県尾花沢の西にそびえている。車道と荒れた林道を走って登山口となるハリマ小屋から歩き始める。この山には周回できるコースがあって便利だ。小さな沢を渡ると、早速ブナ林に入る。ホオノキ、トチノキなども太い木が見られる。さらに登れば、ブナも太い木が現われて、カメラのシャッターが忙しい。途中には水場が現われて、最初の休みをとる。ここから大きく回りこんで尾根に上がる。尾根のブナはわい少化が始まる。そんなに苦労することなく、展望の山頂に到着した。

不老長寿の泉前のブナ林

山頂からは南へ向かう縦走路をたどる。わい性化したブナを抜けると、ヤマユリなどの咲く尾根歩きとなった。標高は千㍍以下でも、花を楽しみながらの尾根歩きができる。コルから尾根を離れて急な下りに差しかかる。すぐにブナの森に入っていく。急斜面が終わるころの森は素晴らしい。水場が現われたので大休憩をとって、ブナの恵みの冷たい水をたらふく飲んだ。



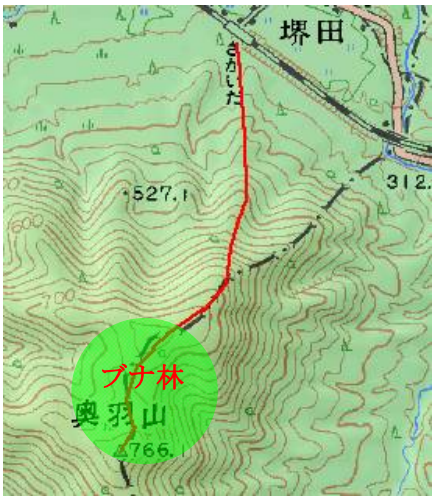
コースタイム：小屋（１時間）翁山（40 分）コル（30 分）小屋

６５）奥羽山

奥羽山脈の奥羽山。標高わずか７６６㍍。恐らく夏道はないと思われる。２月のある日、気楽にこの山を目指した。登山口はＪＲ陸羽西線さかいだ駅。堺田と呼ばれるこの地は、宮城県と山形県の境にあり「分水嶺の駅」とあった。

線路を越えて歩き出すと、暗い植林のスギ林に入る。これを抜けると、今度は植林のカラマツ林。太陽の光が届いて、スギ林よりは気持ちが晴れる。次第に急な登りになってきて、たまらず尾根に出る。尾根からは人家や線路や国道など展望が得られる。小さなコルからは急な尾根に取り付く。このところ雪が降らないので、固く凍った雪面をスキーで登高は苦労させられる。何とか３０分で登り切ると、展望の雪の丘に出た。神室連峰や禿岳などが真白に広がる。周囲のブナも風格が出てくる。三角点のある山頂までは、さらに奥へと進むが、ブナはもっと太く見栄えのいい木が多くなる。三角点山頂の手前のブナの多くは、枯れてツルアジサイに囲まれていた。風の通り道で、枯れたのだろうか。

奥羽山山頂広場のブナ林



広い山頂の一角に大きなブナの木があったので、そこで昼食をとるために腰を下ろしたら、ブナの木には「奥羽山」の手製の看板が掛けられていた。偶然に山頂に立ったようだ。この山に登る人はいないと思っていたら、山頂に今しがた登ったばかりのスキートレースがあって驚いた。風も少なく、じっくりと味わって山頂を後にした。

コースタイム：堺田駅（１時間 30 分）山頂（１時間）堺田駅

吾妻・安達太良花紀行 38　　佐藤　守

サンショウ（*Zanthoxylum piperitum*　ミカン科サンショウ属）

カスミザクラ-コナラ林からミズナラ林にかけての林床に生育する落葉潅木。吾妻・安達太良山域で植生が確認されているミカン科の植物はキハダ、コクサギ、ツルシキミと本種（イヌサンショウも含める）の４種類しかない。

葉は互生で奇数羽状複葉である。葉柄の基部に１対の刺が対生して着く。小葉は長楕円形で、先端はやや窪み、葉縁には鋸歯がある。葉には芳香成分を蓄えた油点があるため葉を擦ると芳香を放つ。

雌雄異株であり、食用とする部分で雌株は実サンショウ、雄株は花サンショウと呼ばれる。開花期は GW 後半の５月初旬頃で展葉し終えた葉の葉腋に複総状花序を着生する。小花は花弁が無く、がく片と雄しべまたは雌しべだけで構成される。雄しべは５個、雌しべは通常２個着く。雄しべの葯の色はやや緑がかった黄色で、開葯すると黄色が濃くなる。雌しべは２個あるので、果実も１小花あたり２個の分果を結実する。果実は熟すと果皮が赤くなり、やがて果皮が裂開して種子を散布する。裂開した果実を指してハジカミと言う。種子は黒く光沢がある。刺がなく大型の果穂を着生する変異種が選抜されブドウサンショウとして栽培されている。

サンショウは森の散策を始めた頃にいち早く覚えた樹で、その当時は花が咲くとは思いもよらず、葉から放たれる香りに満足していた。偶然に花を着けた雄株に出会った時は新発見したようで嬉しかった。知識がついて刺が互生で分果が３個のイヌザンショウも識別できるようになり、果実を着けた雌株にも出会ったが、雌株の花はなかなか見られなかった。これは多分に掘り取りにより残存個体数が少ないことによると思われる。2008 年の春に初めて開花中の株に出会った。新葉と雌花の緑の配色が絶妙でサンショウは花も十分観賞に値することを実感した。

アズマイチゲ（*Anemone raddeana*　キンポウゲ科イチリンソウ属）

落葉樹林の明るく、やや湿った林縁や沢筋に生育する多年草。

葉は根生葉のみで、花が咲いた後から生長する。長い葉柄を持つ２回３出複葉である。小葉は狭倒卵形で側面は滑らかで、先端は円頭～鈍頭状であるが裂刻状の鋸歯がある。

花は根茎の先端から花柄を伸ばしその先に大型の花冠を着生する。花弁は無く、大型のがく片が花弁状に展開する。がく片の数は 12 枚前後で開花初期はがく片の裏側が淡い紫色を帯びる。ラッパ状の花の底部には明るい緑色の子房が鎮座し、その表面には白い柱頭を着けた多数の雌しべが散らばる。更に多数の雄しべが子房の周りを囲み込む。花冠の基部には３枚の大型の総包葉が着生している。総包葉は葉柄があり１回３出複葉である。開花期は４月初旬で晴天日の陽だまりの温度が上がった頃に開花する。日差しを好み、日が陰ったり寒くなると花は閉じてしまう。開花すると３枚の垂れ下がった総包葉と空に向かって広げた花のバランスが絶妙で印象的である。花が大型のためか同じ仲間のキクザキイチゲに比べて花の寿命は短いようである。

図鑑類ではスプリングエフェメラルの代表種と紹介されることも多いが、吾妻・安達太良山域ではキクザキイチゲはよく見られるが、アズマイチゲは確認したことがなかった。それが、2006 年の春に河川敷の護岸工事で川辺林が伐採し尽くされた道路脇でアズマイチゲの小群落に遭遇した。以来、春になるとその場所に通い続けているが重機でいつ削り取られてもおかしくない状況である。1987 年版の福島県植物誌によると植生は普通と評価されているのだが、吾妻・安達太良山域ではほとんど絶滅種である。その主たる原因は山野草としての盗掘に加え、ほ場整備や護岸工事と称する自生地の破壊によるものではないかと考えている。

第 103 回自然観察会案内：浪江室原不動滝のウラジロガシ林と高太石山

日時：2009 年４月 26 日（日）7：30～16：30

集合場所：小鳥の森第１駐車場　集合時間：７：３０　参加定員：２０名

内容：早春の照葉樹林と広葉樹林を散策します。

日程：福島７：３０（車・国道１１４号）９：３０浪江町室原不動滝周辺のウラジロガシ林分（下車）１０：００＝１０：３０高太石山ハイキング１４：００（車・国道１１４号）１６：３０福島

準備するもの：昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、手袋、帽子、着替、昼食、テルモスまたは水筒、嗜好品、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

参加費：保険代（300 円）　　申し込み：４月 25 日(土)まで

＊　その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加申込先：高橋淳一（024-593-1990・080-3320-1804）または佐藤守（024-593-0188）

第 104 回自然観察会案内:西吾妻ロープ補修ボランテア

本事業は公益信託自然保護ボランティアファンドの助成により実施いたします(「平成21 年度公益信託自然保護ボランティアファンド助成事業」)。作業は広範囲となることから、2コースに分けて実施いたします。

＊　今回は米沢ネーチャーフロントとの共同開催により実施いたします。

＊　経費は実費(ゴンドラ利用料)の半額程度負担となります。なお、保険金は無料とします。

【Aコース】

1. 実施日　:**6月21日(日)8時30分～16時30分(雨天時6月28日に順延)**
2. 集合場所:福島県果樹研究所　　3. 集合時間:6時30分
4. 参加定員:10 名程度(作業実施責任者含む＝佐藤守)
5. 内容　:西吾妻避難小屋周辺及び若女平分岐～若女平間約 100mの誘導ロープの補修並び高山植物の変化状況観察（1 名あたり1kg程度の荷上げ＝アルミロープステック･ロープ)
6. 日程　:6.30(果樹研究所)→8.00(天元台スキー場ゴンドラ乗場)→9.00(ﾘﾌﾄ終点)→11.00(西吾妻避難小屋)→(作業･昼食)14.00→15.50(ﾘﾌﾄ終点)→16.20(天元台スキー場ゴンドラ乗場)→17.50(果樹研究所)
7. 準備品　:登山靴(長靴)、雨具、手袋(作業用)、昼食、水筒、筆記用具、嗜好品、その他(あればハンマー･ペンチ)
8. 申込み:6 月 20 日(土)まで高橋(024-593-1990 携帯:080-3320-1804)、佐藤(024-593-0188)へ

【Bコース】

1. 実施日　:**6月21日(日)8時30分～16時30分(雨天時6月28日に順延)**
2. 集合場所:①福島方面＝四季の里　東側駐車場　②郡山方面＝裏磐梯ビジターセンター駐車場
3. 集合時間:①福島方面＝6時30分　　②郡山方面＝7時40分
4. 参加定員:5名程度(作業実施責任者含む＝高橋淳一)高橋(024-593-1990　携帯:080-3320-1804
5. 内容　:西大巓～西吾妻避難小屋間の誘導ロープの補修並びヒナザクラなど高山植物変化状況観察(1 名あたり1kg程度の荷上げ＝アルミロープステック･ロープ)
6. 日程　:6.30(四季の里P)→7.40(ビジターセンター)→8.00(グランデコスキー場)→8.30(ゴンドラ乗場)→9.00(ゴンドラ山頂駅)→11.00(西大巓)→11.20(水場周辺:作業場所)～13.30(作業･昼食)→14.00(西大巓)→15.30(ゴンドラ山頂駅)→16.00(ゴンドラ乗場)→16.30(ビジターセンター)→17.40(四季の里P)
7. 準備品　:同上　8. 申込み:同上

＊内容及び参加コースについては、事務局より、変更を依頼する場合があります。また、事前調査並びに資材荷上げ作業(6 月7日または 14 日)の協力者も合わせて募集いたします(数名程度:6 月 6 日まで高橋へ 024-593-1990　携帯:080-3320-1804)。

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替０２１７０－０－２４３５１「高山の原生林を守る会」へ

[編集後記] 植物が眠りから覚め、次々と芽を出す時期を迎えた。樹々が萌芽する光景は、毎年、繰り返し見ているのだが、毎年、新鮮な感動を覚えるのは何故なのか。新たな生命の息吹は１日１日が劇的に変化し逞しい限りだが、ブナやトチノキ、ミズナラなどの極相林の構成樹は一気に葉を展開するのに対し、ダケカンバやヤマハンノキなどの先駆種は時間をかけてゆっくり葉を開くのだそうだ。それぞれに種の繁栄を確保するために長い年月を経て遺伝子に刻み込まれたフェノロジー(季節性)だという。人間が感動するのは発芽の一瞬に種の生存をかけている姿を無意識の内に感じ取っているからかもしれない(M.S.記)。

「高山」高山の原生林を守る会会報　　第６８号　　２００９年４月発行
編集・発行　：　高山の原生林を守る会　HP：http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm
代表連絡先　：　高橋淳一　Phone　０２４―５９３－１９９０（夜間７時～９時）
郵便振替　：　０２１７０－０－２４３５１　「高山の原生林を守る会」
入会方法　：　年会費（５００円）を添えて上記まで
編　　集　：佐藤・奥田・鈴木